

パイドロギー —わが国における生成期の児童学—  
お茶女大人間文化研究科 齋藤薫

**目的** 今日、児童学は家政学の一分野に位置づいているが、各々の児童学研究においては家政学同様、教育学、心理学ほか他学問領域との接点が見出だされる。児童学とはどのような学問なのだろうか。本研究では、児童学の原語とされるパイドロギー Paidologyに焦点をしばり、この実体を明らかにすることでわが国の児童学の生成期の一面を探り、わが国の児童学がとった方向性と家政学における可能性を考察することを目的とする。

**方法** まずパイドロギーについて、その確立者O. クリスマンの論稿や周辺の史料から、クリスマンが企図したパイドロギーの全貌を整理した。次に、雑誌『児童学研究』他関連文献から、わが国におけるパイドロギーとクリスマンの紹介と受容、批判の経緯をたどり、わが国の児童学がどのような動機や背景から生まれ、どう発展したのかを分析した。

**結果** パイドロギーは、19世紀末のアメリカで、発達心理学者S. ホール門下のクリスマンが構想した「児童を対象とする科学」であった。日本では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、児童学と訳されたパイドロギーが提唱者クリスマンとともに紹介され、教育学や心理学から枝分かれした児童研究の学問的確立が目指された。しかし、国内で独自の研究が進むにつれ、科学的手法と厳格な体系的枠組を重視し、児童を親子や家族から切り離してとらえる傾向をもつパイドロギーに批判が寄せられるようになり、児童学の英訳としても原語 PaidologyではなくChild-Study が採用されるようになった。日本の児童学が、パイドロギーの名称と概念から出発し、しかし今日ではパイドロギーが全く顧みられないのはこのような経緯による。児童学が家政学と接点ともったのは、それ以降のことである。